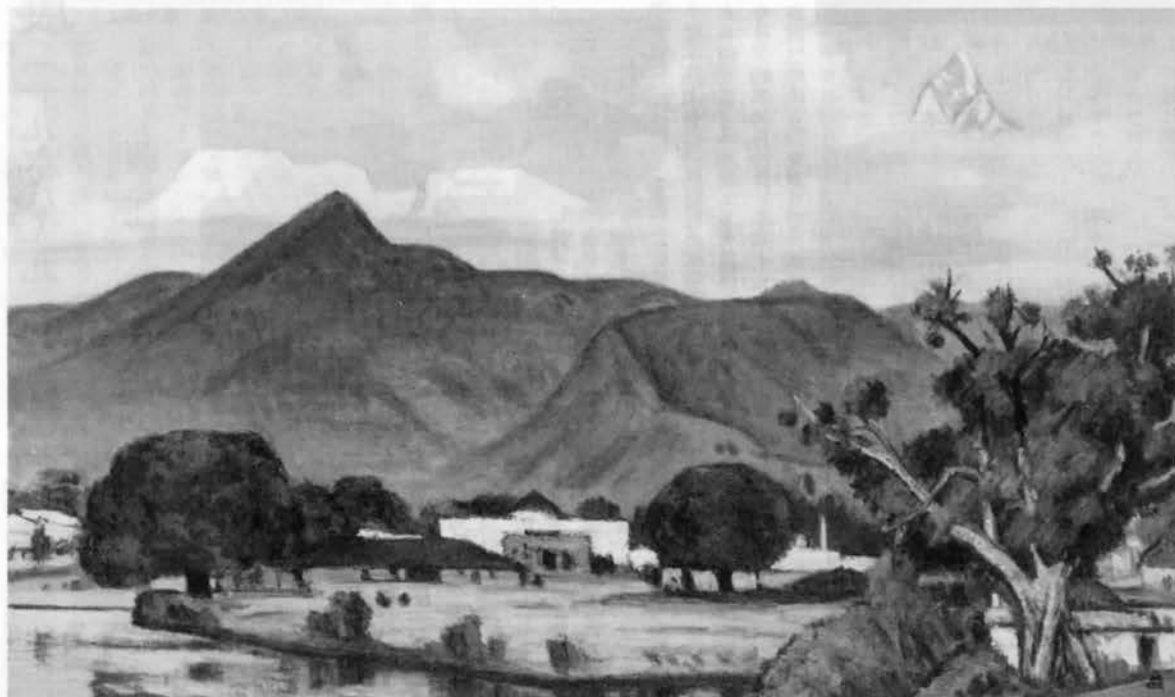


# 山と博物館

第37巻 第7号 1992年7月25日

大町山岳博物館

特集 藤江幾太郎ネパール油絵展 7/19~8/23



藤江幾太郎 「ポカラ湖畔」 油M80 1992

この度大町山岳博物館にて  
 藤江幾太郎ネパール油絵展  
 (一九六八—一九九二)が  
 開催されます。

藤江さんは白日会と日本山  
 岳画会の重要メンバーであり、  
 茲二十数年、ネパールに通つ  
 ての制作を続けておられます。  
 近年この国を理解し愛好し  
 ようとする人のおえていられる際、  
 この企画は有意義であり、藤  
 江さんの作品を通して、あらた  
 めて地球上の屋根の基張らし  
 さを教へてくれるものと、一  
 人でも多くの観覧者で盛会のよ  
 う祈ります。

文化功労者  
 日本芸術院会員

伊藤 清永

## ネパール油絵展(一九六八〜九二)

藤江 幾太郎

○はじめに

この度大町山岳博物館の企画で藤江幾太郎ネパール油絵展を開催することとなった。私は昭和43年秋、初めてネパールを訪れて得た画題を基に制作、翌年、所属の白日会展に出品以来、連続してネパール油絵作品を出品し続けた。ネパールへの渡航13回、滞在は500日を越える。今回は、この内より自選した24点を軸とし、風景画14点、人物2点、仏蹟5点、素描5点、計50点をもってネパールを識つて頂くよう計画した。

○初めてネパールの土を踏む

昭和43年に日本ヒマラヤ協会が設立され、ネパール行募集の説明会があった。私は迷つた。たまたま同年の7月、新宿小田急デパートで立正大学カピラ城址発掘調査展があり、大きな感動をうけて、ネパール行を決意し申し込んだ。



ボカラバザール・午後 油F80 1970

その翌日、リーダー柴田会長以下8名は、小型双発機でボカラに向かった。ボカラ空港には親日家のタカリー族の有力者インドラ・マン・セルチャン氏が笑顔で出迎え、一緒にほど遠からぬボカラ湖を遊覧し、聳えるアンナプルナ峰に絶賛の声をあげた。



ボカラ空港附近 油F80 1975

第一回例会は、結局私の参加したアンナプルナ班8名、エベレスト方面16名の計24名となり、43年10月19日、ネパール大使館員、川喜田一郎氏らの見送りで、羽田を発つた。カ

ルカッタに一泊して我々一行はカトマンズ着。シャンカール・ホテルに泊り、ここで2班に分かれて行動することになる。

空港前のスノービューホテルで夕食を共にした後、車で4km夜道を走り、バザールにあるインドラさんの豪邸「白い館」に泊まった。そこにはタカリー族の人達が数名、歓迎のために来ていた。我々日本人と同じような顔付きで、態度物腰もよく似て、下手な英会話でも、打ちとけて話が出来たような気がした。この席上の一人アムリツ・ブラサド・セルチャンさんには、後日大変お世話になることになる。

ボカラでは、その前年(42年)から電灯がつくようになったのだが、電力が不足で街の半分ずつが一日交代の点灯という。

○ボカラに残つて絵を描く

翌日、一行はトレッキングに出発したが、私は「白い館」に残り、屋上や広い前庭に出てヒマラヤの聳える風景を終日描き続けた。数日後一行は帰着。カトマンズへ戻ることとなるが、インドラさんも同行するという。私は残つてバザールの布地店アムリツ・セルチャンさん方にお世話になることになる。



ボカラバザール 油P50 1977

ボカラバザールの大通りを挟んで、4階建のレンガ造りの家が並んでいる。1階が店舗、2階が居室、3階が台所と食堂、4階が聖所と倉庫、そして屋上は見晴らし台。裏の方に面したところは緑が美しい。ポインセチア、ブーゲンビリアが咲き、バナナ、マンゴーが実る亜熱帯(海拔800m)。聳えるヒマラヤの白銀の峰々。世界第一級の風景美というべきであろう。私は毎日この屋上に昇り、沢山の絵を描いた。

この布地屋の主人はアムリツ・ブラサド・セルチャンというタカリー族の一人。若くして生地ツクチュを離れ、苦学力行して商売の道を会得、成功者の一人になったという。末子のスニル君は日本の大学を卒業、今は父君の手伝いをしてる。私は歓待されるのいいことに、57年にホテル・ドラゴンが定宿になるまで、累計60日くらいお世話になった。今回展示した白日会展出品作24点内のボカラ13点の大部分は、同家を基地に作られた。



ボカラバザール俯瞰 油M80 1981

○ツクチェへ

46年、2度目のボカラで知り合いになったアルジュン・トラチャン君は、55年に日本人妻ヒロ子さんを迎えカトマンズでホテルの経営を始めた。私と妻は以降ここを定宿にした。アルジュン君は、彼の郷里ツクチェに我々を誘った。そこはかねてからインドラさんからも、郷土の美景として自慢を聞かされていたところだ。

カトマンズからジヨムソムへフライト

直行便がとれたという。家内と共にアルジュン君の案内で出発、ツクチェには夕刻着いた。新月がニルギリの端にかかっていた。村ではヒロ子さんの両親が来たという噂が一瞬にして村中に広がった。一週間くらいの滞在で、ダウラギリとニルギリ夕照、100号2点の原画を得た。村のキューバルゴンバは秋の大祭で賑わい、帰りが一日遅れた。

59年、再びツクチェを訪れた。カリガンダキの峽底から見上げるヒマラヤは眉を圧するようだ。この時はダウラギリを少し下流の方から描いてみようということになった。ホテルドラゴンの弟がカロパニで宿をやっていた。



ツクチェの夕暮 油F100 1982

仏法研究のため当時鎖国だった西藏へ潜入すべく、カトマンズの高官の紹介で郡長館に來宿し、情報を収集してその方策を練ったことは、師の著書「西藏旅行記」に明らかである。私は英文で書かれた本(原書)をカトマンズのインドラさんの館で拝見した記憶がある。

ゴピンドさんはその時点で、無人の郡長館は盗難の恐れがあるので、ツクチェの本宅に仏像、沢山の経文を移して保管してあるとのこと。私も拝見させて頂



ダウラギリI峰 油F100 1984

るといので行つた。See You Lodgeという名だった。ツクチェのアルジュン君の母堂らは心配して馬を雇ってくれたが、私は荷物をポーターに持たせて徒歩四時間くらいの行程を歩いた。空身なら歩く方が楽だと思つた。

ここではダウラギリI峰の長い東尾根が縦に累積して面白い。その右下にアイスフォールの上部が見える。右に続く山稜はツクチェ・ピーク。前記のダウラギリ図と双幅になる(油、何れも100号)。

ツクチェではこの郡長(スツバ)館を管理している宗家の一人ゴピンド・マン・セルチャン氏に会った。明治の昔、河口慧海師が

いた。ゴピンドさんはいずれ郡長館に移るようになれば、河口慧海記念堂を作りたいと言っていた。

平成2年、3度目のツクチェ行の時、ゴピンドさんは61年に亡くなられたことを知ったが、郡長館の隣りのブランデー工場が完成、ゴピンドさんの奥さんと息子さんとで経営していた。居住も郡長宅に移り、2階の大きな仏間もかなり綺麗になって、仏像や多数の経文も整理されていた。慧海師が籠られたキューバルゴンバは既に老朽崩壊したので、村の中央に新しく造られ、ちょうど11月6日は大祭だった。

ツクチェ村は富山県利賀村と姉妹村になり、今年8月7日から9月6日まで利賀村で「蕎麦博」が開かれる。

○ナムチェバザール

エベレストの見えるクレーンブ地方には、47年と61年の2回行った。第1回目は旅行社募集のトレッキング・ツアーへの参加だ。ナムチェを過ぎて、まだできたばかりのエベレスト・ビュー・ホテルで、奥地のカラバタール



ナムチェ 油F100 1990



ナムチェバザール 油F100 1987

この時もアンブルワ家の庭先で一点、そして少し下った民家の附近からナムセルクを描いた。本展では100号2点と60号1点を展示した。

そのためにジョサレから左峰を高巻く新道ができ、前記合流点のドドコシ側上手に出て対岸に渡り、歩きにくい新道を一時間ほど苦登して昔のナムチェ街道に出た。エベレストが最初に見える所である。

に行く班と、ゴキョ組と別れたが、私はビュー・ホテルに滞在して絵を描き、ナムチェに下つて、村長アンブルワ家に泊まってまた絵を描いたりして、奥地から下つて来た仲間と合流、ルクラへ出た。

61年、2度目。知り合い七人は宿のヒロ子さんをリーダーにタンポチエ僧院まで行つてくることになった。シエルバのチャンガレは同行したけれども体調がよくなく、私と共にナムチェに停滞して、タンポチエから帰る一行を待った。この時は前年ボテコシ上流水河湖決壊のため水量が急増して、ドドコシ合流点のヒラリ橋が流され、ジョサレまでのゴルチユの道路も流されて通行不能となった。



カトマンズ旧王宮 油F 80 1976

翌平成元年には、ホテル・ドラゴン主人がクシナガラとルンビニへお詣りに行くという。パイラワを基点に、インド

○カトマンズとバクタブル  
カトマンズ市内では木造の朱い大きな旧王宮(80号)と、その裏手に当る王宮入口近くのカルパイラブ像のあたりを80号に描いた2点となった。バクタブルの風景はカトマンズから来るトローリバスの終点附近から見た景色で、古色蒼然たる煉瓦の建物がハヌマンテ川の岸に立並びその上にニヤタボラ寺院の五重の塔が見え、遠くジュガール・ヒマールの白い峰が連なり、ひと際高い峰はドルジエラクバ、空はあくまで青い。  
白日展には「ヒマラヤの古都」という題で出品した。平成元年作。中沢賞を受賞した。

○仏蹟巡礼

ホテル・サンセットビュウのアルジュン君は46年以前の友。55年にはツクチェへ、57年にはダージリンへ、61年にはヒロ子さんと一緒にナムチェへ行つた。ヒロ子さんは在日中は、私の属している新ハイキングクラブのメンバーであった。  
ハリ・ドーチ・トラチャン氏は僧職の家系にあり、ツクチェにマハカリ・ゴンパという寺がある。



バクタブル 油P 10 1982

国内をタクシー3時間でクシナガラ涅槃堂の前にあるホテルに着いた。ここに泊して参詣、写生など忙しく過ごした。翌日はまたタクシードライワに戻り、ルンビニへ。マヤ堂に詣で、ムスタン寺にも参詣し、タクシードタンセン経由、ポカラのホテル・ドラゴンに安着した。  
2年、アルジュン君と、釈尊初転法輪の地サルナートへ行くことになった。初転法輪(釈尊がブダガヤで得られた悟り(法)を初めて仏教として世に広めた)寺の左右の壁画仏像は、野生司香雪画伯苦心の作で一九三六年完成という。  
アルジュン君とハリ・トラチャン氏両人のお蔭で、釈尊四大仏蹟の巡礼が終った。仏蹟巡礼に際しては、在家仏教協会、殊に二橋さんに多くのご教示を頂いた。改めて深謝する次第である。



ルンビニ園マヤ堂 油F 20 1989



タムセルク 油F 12 1986

《作者略歴》

明治43年・横浜市に生まれる  
昭和12年・第14回白日展に初入選

31年・白日会会員に推挙される

・以降、山岳画の個展を毎年開く (今年で37回)

59年・白日会60年記念特別賞受賞

平成1年・白日会中沢賞受賞

現在 白日会会員・日本山岳画協会会員  
日本美術家連盟会員

山と博物館 第37巻 第7号

発行所 長野県大町市 TEL0267-2211  
印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館  
大町山岳博物館  
定価 年額 一,二〇〇円(送料共(切手不可))  
郵便振替口座番号(長野四一三三九九三)